

# 立山信仰の昨今、立山で今ひとつの楽しみを

2015.09.25

我らは山に自然と足が向き理屈抜きに登る。仮に理屈をつければ、山のすばらしさを堪能しに、あるいは山にあこがれて、というところであろう。さらに理屈を求めるならば、それは歴史ロマンであり、ついこの間までは信仰の対象であった人間の精神活動のあれこれ(歴史)である。

我らは、そんな理屈のもとに山登について大自然の雄大さを求めるとともに山岳信仰という結晶化した山の文化を垣間みることにより、登頂達成感に加えて自然と人間の営みを楽しむことができ、また山に入り込んだそのときから不思議な感情に浸りきることができる。

理屈の前置きはこのくらいにして、我らの立山について語ろう。なぜ立山かという、著者が富山人であり、こよなく立山を愛しているからである。当然のことながら、我らの立山登山についても、文化と自然の両面での楽しみを満喫するということになる。しかも、我らだけでなく皆さんとともに、立山のことをもっともっと知り楽しむことにしたい。

そこでここでは、(大自然は別稿で準備するとして)立山の文化性としての立山信仰について、立山一帯が宗教の大空間を彷彿させることを述べ、皆様がもつ歴史ロマンをかきたてることにしたい。おつきあいください。

- 19世紀後半 女人禁制解除
- 20世紀前半 青年立山登山
- 20世紀後半 登山の大衆化

## <1> 立山信仰

### 1. 信仰

山の秀麗さや気品さが我らに山への畏敬の念を持たせ、その念は神への信仰へと変わっていく。山は、天空への入り口として、いや天空として、神が住んでいるところとされるようになったことは容易に想像がつく。もともと山岳信仰とはまさにそうしたところから自然にでてきたものであり、仏教とあいまって進化したといえよう。

さて立山の場合、霊峰が極楽浄土であり、火山噴気孔や湧き出し温泉が地獄であり、天国と地獄が隣接しているのが特徴である。こうしたシチュエーションは山岳信仰にはうってつけであり、後年の布教とあいまって、立山信仰が一大勢力をもったものといえる。

立山信仰の基本は「立山に登れば生まれかわれる。頂上に上ると生きながらにして生まれ変わる」といった信仰である。とくに、疑死再生という考えは「山に



劔岳 劔御前 立山 浄土山

立山連峰、氷見から望む、尾間氏撮影



立山の遠景・中景・近景

参考までに、立山の歴史を記しておく。

・・・ 狩人の時代

702年 佐伯有頼による開山

747年 大伴家持の立山の和歌



劔岳 別山 真砂岳



浄土(立山)と地獄(地獄谷)

入ると死に、拝んで生まれる」のことであり、山に登ることが信仰の形態となったのである。なお、俗説では「立山に上ると地獄に落ちない」という明快な教えもある。

## 2. 立山一帯が仏法の世界

a. 立山一帯を構成するいくつもの山があり、地獄もある。これが仏界を構成している。まずは、霊峰を極楽浄土としており、これには

「浄土山(過去の世界)、雄山(現世の世界)、  
別山(未来の世界)」

の山がある。

次に、地獄については、火山噴気孔や湧き出しのあるところを地獄谷と称している。そこには、

「賽の河原、血の地獄。冷水の地獄、  
湯の地獄」

がある。また、地獄には、針の山として劔岳がある。

### b. 立山一帯の山々

当地には、大汝山、富士の折立、大日岳、室堂山、薬師岳、鬼岳、獅子岳の山々に加え、弥陀ヶ原、室堂、弘法、称名滝がある。これらは、仏界のロケーションを構成するので、仏法にちなんだ名称となっている。

## 3. 山に登るといふ信仰

立山三山といえは雄山、大汝、富士折立の三つの山をさすが、立山信仰では雄山、浄土山、別山のことであり、仏界として現世、過去、未来をそれぞれ対応させている。

立山信仰では次のような登り方により信仰を極めることになる。すなわち、室堂からまずは現世の雄山に上る。次に過去の世界である浄土山に登る。続いて現世の雄山に戻った後に未来の世界の別山を上る。そして現世の雄山に戻り、室堂に帰還する。

これをもって、生まれ変わりをなしたとするのである。

室堂 → 雄山 → 浄土 → 雄山 → 別山 → 雄山 → 室堂  
現世 過去 現世 未来 現世



立山三山、みくりが池から見る

## 4. 曼荼羅

平安時代にさかのぼる立山信仰について、なぜ全国



曼荼羅、立山博物館 HP より

的に知られるようになったのであろうか。それは、芦峯の信徒が布教のための会を組織して、立山信仰の教えを可視化した曼荼羅という絵を用い全国各地を回って活動した努力の結果である。なお、越中売薬については、彼らが布教の傍ら薬を販売したことがルーツといわれている。

曼荼羅の絵には、天界と地獄を阿弥陀如来・閻魔大王などととも描かれ、また人の一生を誕生・成長・老化・死の過程でも捉えて描かれている。

なお、曼荼羅絵は絵鏡ともいわれ、自分の心が写るとされており、その意味では神様・仏様とのコミュニケーションツールともいえる。

## <2> 立山開山

### 1. 山の神、開山とは

#### 1.1 山の神

山はキコリや猟師の生業の場としたところであり、同時に上の住む場所でもあった。神は熊や鷹に姿を変え、山の生活を支えていたのである。そんなところに、修験者が山に入って修行鍛錬の場としたのは、やはり仏教が入ってきてからであろう。

ではどうして、立山信仰として多くの信者が集まるようになったのか。逆に言えば、だれが立山信仰への道を切り開いたのか。これは立山開山の話として興味深い。

#### 1.2 開山とは

宗教施設を山のなかに作ることをいう。このため、まずは登山道を整備し、開けた土地に社殿を建設する。次いで仏像を安置する。この一連の行為が開山である。立山では、ふもとの岩峯寺・芦峯寺から始まり室堂を経て雄山山頂までの登山道を整備したものと思われる。

## 2. 佐伯有頼伝説



702年には佐伯有頼が立山を開山したという伝説がある。平安期の頃、佐伯有若（実在人物）が越中国司のときのことである。有若の息子有頼は、父愛用の逃げた鷹を追いかけ山に入ったところ熊に出会い熊に手傷を追わせ、奥山へと逃げる熊を追い室堂の洞穴に到達した。そこには血を流している阿弥陀如来（熊が変身）と不動明王（鷹が変身）が立っていて、阿弥陀如来からは有頼に「立山を開山するように」と告げられたという。これが有頼伝説である。



胸に矢が突き刺さった大日如来・不動明王、立山博物館 HP より

### 3. 立山開山伝説の検証

#### 3.1 和歌

有頼の後年、越中国司に赴任した大伴家持が越中国にて748年、立山を題材に読んだ歌には次のものがある。

立山に 振り置ける雪を 常夏 [とこなつ] に  
見れども飽かず 神 [かむ] からならし

この歌には山(立山)は依然として神の山と言っている。

これをどう捉えるのか。有頼以降46年経過して、仏教と神道はどうバランスしていたのか。開山とはいっても仏教ではなく、神道が中心だったということなのであろうか。まだまだ開山が道半ばなのか。神仏習合の観点から考えてみよう。

#### 3.2 神仏混合

仏教伝来の後、587年には物部氏と蘇我氏とで仏教の受け入れをめぐる権力争いがあった。この争いの後115年経過した佐伯有頼の時代においても、地方で仏教がすんなりと受け入れられたのであろうか、考え

たい。

肯定説としては、中央権力の介在もあって神道側が積極的に仏教に寄り添ったというものである。(そうしないと神道が立ちゆかなかったといわれている)

他方否定説としては、地方では八百万神が農耕社会に入り込んでいたために、仏教進出に際し争いがあったというものであり、神道の神である熊が矢で射られたというのも、混乱を象徴しているように思える。

立山の場合、いずれにしても神仏習合で神道が仏教と一線を画したことにより、仏教側で開山がすすめられたにもかかわらず寺院の建立はなく、神道が仏教の教えを活用した、ということができる。平安の家持の時代でも立山を神の住まいとみていたといえる。

#### 3.3 誰が開山か

佐伯有頼が立山開山したといわれているが、1人の人間で果たして開山が可能だったのか。そう考えるのではなく、都から関係の方々がやってきて開山したのでは。佐伯有頼を持ち出したのは地元の支援を得るためなのではなかろうか。事実、立山のふもとにある芦峯寺の地域では佐伯姓がほとんどであることを考えると、推量ではあるが都からの指示という説が浮上してくる。

佐伯有頼については、記録上の人物でないだけに、実存したのか、あるいは他の方ではといった憶測もある。なかでも、片貝川の流域に住んでいた方ではとの説もある。ただし、これには立山へのアプローチが常願寺川系に比して難コースであるという難点がある。

### <3>各種施設

#### 1. 社殿

神道ではご神体が山や岩や樹木などの自然物であり、参拝はご神体に向かって行うものである。時代が下るに従い、神様とのご対面の場所を社(拝殿)という建物を造るようになった。ご神体が自然物でなければ当然、社(本殿)に特別に安置設置され、そのうち神に奉納する場所(幣殿)が拝殿と本殿の間に設けて三棟として、神社は今にある形態となった。

神社の設置場所について、ご神体と氏子とを結ぶことがポイントとなる。村の鎮守様の場合には、村のはずれの標高の高いところ(洪水を避けるため)が立地場所であり、拝殿は氏子のいる方向すなわち村の中心に向けている。これは神が氏子を見守ると考えるのであり、ご神体が木や岩の場合であればそのことがよくイメージできる。

これに対して、山がご神体である場合も同様、拝殿

正面が氏子のいる方向に向くことになるが、山頂に位置する社については(太陽光を常に受ける方向として)南側を向いている。これは多分に太陽神を意識していると考えられる。よく社屋背面が北を向いているから、不動の方向(北極星の方向)が意味を持つといわれているが、そうではない。

立山一帯における社について、社の向きを原則南にしているが、山頂部敷地の状況に応じて建設しやすいように方向が設定されている。以下には、飯田肇氏(富山県立山カルデラ砂防博物館)の調査結果を記す。

**a. 劔岳の祠背面の向き**

落雷で数年前に祠が燃えたので再建された。

旧 北西向き(早月川河口方向)

新 南西向き(鋤崎山方向)

**b. 別山の祠背面の向き**

今までなかったようだが最近作られた。

新 西向き(屋根の向きは雄山方向だが、  
祈る向きは西向きになっている)

**c. 雄山**

山頂の社は峰本社とよばれている。社背面の向きは北向き(劔岳方向)。



岩嶺の  
雄山神社



旧の峰本社、写真転写



**2. 石仏**

**a. 石仏**

立山を水源とする常願寺川の扇頂部となる岩嶺寺から立山室堂までの直線にして 30km 程の立山街道・立山登山道において、33 箇所石仏が配置されている。



熊の神社 街道沿い石仏

スタートは岩嶺寺の熊の神社であり、最後は室堂山荘の付近である。その昔、参拝者が地蔵に見守られながら登っていたのである。

**b. 一の越から頂上までの石仏**

石仏は、一の越から頂上までの各地点にも祠付で設置されている。これは以下のように意味をもたせている。すなわち、阿弥陀如来の体の各部が石仏として祭られている。

一の越	スタート	二の越	足、拝みは西
三の越	腰	四の越	肩
五の越	首	頂上	頭

**<4>. 女人禁制**

女人は神聖なところには入れない。根拠がいくつかある。

- ・男性修行僧が性欲に惑わされる。
- ・神通力が失われる。
- ・体外に出た血は穢れそのもの(男女とも)。
- ・山の神は女性であるので女性入山により女神が嫉妬する(災害が起こる)

からともいう。

こうした伝統は鎌倉期に出来上がったとされている。法然や日蓮などは禁制に反対したという。經典に無いことをもっともらしく行動規範にすることに異議を唱えたものといわれている。

女人禁制の実際はどうであったのか。地域によって事情は異なっていた。

まず、富士山では観光客は大事な客であり、女性の入山も禁制ではなく商業の一環でウエルカムとなった。ただし、江戸など各地では、表向きは女性のために庭に富士山を模した丘を作り富士登山を実感するといった仕掛けが多く設けられた。

一方、立山では禁制まで厳格に守り通していた。しかしながら、その昔に禁制をしいたことは実際には登っていた人がいたという裏返しを意味している。禁制は後から取ってつけたことであり、法然が言うように女性を山から締め出す口実ということなのであろう。

時代が下り、富士山は江戸後期、立山、白山は明治初期(1872年)には禁制解除となった。しかし、出羽三山は1997年になってやっと解禁となったが、いまだに禁制を続けているところがある。理由は、禁制という伝統を守るためである。とにかく、禁制の伝統も長く続けば立派な文化であるということのようである。



#### 4.2 布橋灌頂会 (ぬのばしかんじょうえ)



布橋、布橋灌頂会 HP より

立山の場合、富士山の場合と同じように女性用に立山登山をさせるのではなく、生まれ変わるといふ信仰をふもと(芦峯)で再現する仕掛けが作られた。布橋灌頂会と呼ばれるものである。赤い橋に白布を敷き、その上を目隠した女が(川を渡り)歩くのである。現世にやましいことをした方は橋から落ちてしまうとされている。

無事渡り終えた方は真っ暗な姥堂に入り、時を見て姥堂の東側扉を一気に開けて与四兵衛山(立山山麓雷鳥パレースキー場北隣で常願寺川左岸に位置)を背景にした極楽浄土が再現されるのである。この行事は江戸時代後期から始まり、明治時代に途絶えたが今(2011年)では観光用に復活した。

#### <5> 立山へのルート

立山信仰は立山の見えるふもとから始まる。信仰の基点位置は富山と滑川であり、そこから立

山を見ながら接近するようにルートがある。以下に列挙すると；

##### ◁富山基点

- ・大山街道をくだり、岩峯寺・芦峯寺を経て、千寿ヶ原に出て、美女平・弥陀ヶ原・室堂から、立山へ。芦峯寺ルートと称される。
- ・岩峯寺から芦峯寺を迂回するよう本宮から千寿ヶ原に出て、美女平・弥陀ヶ原・室堂から、立山へ。もうひとつは、美女平を経ず、立山温泉から弥陀ヶ原にでて室堂、立山へ。岩峯寺集落と芦峯寺集落が信者の奪い合い合戦をして、互いに犬猿であったために、岩峯寺からの本宮経由のルートが作られた。

##### ◁滑川基点

- ・上市川支流郷川からのぼり、山加積や黒川谷から護摩堂、千石城山をへて大熊山から早乙女に入り大日岳、立山へ。
- ・早月川をさかのぼり、馬場島を経て室堂野越から室堂、立山へ。
- ・上市から大岩に出て、浅生、種を経て、大辻、大日岳、立山へ。

上記のルート群は、佐伯有頼から始まった立山信仰当初のものである。やや時代が下って当時メジャーな宗派の天台宗と真言宗が立山に参入してからは、真言宗が大岩ルートを、天台宗が芦峯寺ルートをそれぞれ分担していたが、そのうちのどの宗派も芦峯寺ルートを利用するようになった。

江戸時代にはいと、当該地を支配する加賀藩は、立山ルートを岩峯・芦峯の一本に固定化し、かつこれを奨励して他ルートを完全に寂させた。また、立山か



立山登山ルート、黒部ルートは不明、鈴木良平氏論文より引用

ら長野に抜けるルートも立山ルート独占と防衛上の理由で禁止とした。かくして、立山信仰による（観光の）上がりは加賀藩の財政を大いに潤すことになった。

## <6> そしていま

今、立山には年間 100-120 万人が訪れている。登山半分、観光半分といったようにもえる。このうち登山については、ハイヒールや革靴の都会客が春山でもにわかに登山する姿をしばしば目撃したが、ここ 10 年前くらいからは、山のマナーが周知徹底されたのか、無鉄砲なイカレがいなくなったのか、そんな客は皆無となった。

では観光客の多くは、何に期待してやってくるのであろうか。大自然をみたいとか、登山による達成感に浸りたい、など理由が挙げられ、どちらかという立山信仰は後付で聞くといいところである。がしかし、自然鑑賞もさることながら、初詣と同じのりなものであろうか、山頂の社務所での買い物や峰本社での礼拝などの行為も目を見張るものである。

では、そののりの源は何であろうか。それは神社(仏閣)もが観光対象であるからである。江戸時代には信仰心の厚さもさることながら信仰による観光旅行が許されていたこともあって、人々にとって宗教施設観光が何よりの楽しみになっていたのである。

立山の場合、立山信仰から立山観光にモードがかわったとはいえ、立山登山への価値付けには立山信仰が立山の歴史・文化として大いに関与している。神社が依然として観光を下支えしているということになる。かくして、立山は時代に対応するかのごとく君臨していることができる。

## <7> まとめ

立山の歴史と文化を立山信仰の面から 8 世紀にさかのぼって展望したところ、山の文化はまさに立山信仰そのものを実感することができた。とくに神道と仏教を神仏習合以上の壮大な仕掛けにはおどろくばかりである。すなわち、第一には、立山一帯が仏界として、現世、過去、未来、の時間軸ともに、極楽浄土と地獄の空間軸で捉えられ、第二には、神道世界として天界イコール山と直接結びつけた古代神が脈々と流れている。こんな壮大なスペクタクルは他に例を見ない。ここに、先人たちが今風に言えば如何にロマンをもとめていたのかがわかる。そんな立山に今においてもなお不思議な畏敬の念をもつのも自然な成り行きといえよう。

## <あとがき>

富山では、立山が一番の観光資源とされているので、観光に際し、文化・歴史の価値付けを核にした差別化施策が図られている。

では実際に、どこまで文化の価値付けを行ったのか、行っているのか、調べていたところ、案の定、上滑りの観光として都合の良いように、歴史と文化を観光につなげていた。これは山の大衆化のなせる業であり、経済活動に即した行為でもある。しかし、これに満足しない方々も当然おられるので、私は急遽本稿を執筆した次第である。

内容については、地元の歴史家、神主さん、アルピニスト、学芸員、研究者などの方々へのヒアリングから得られた情報が主である。

末筆になりましたが、関係各位にはお世話になりました。ここに記して謝意を表します。また、皆様には最後までお付き合い下さいましてありがとうございます。

## <参考文献>

- 1) 大伴家持関係の資料として高岡万葉博物館発行の多数の出版物がある。
- 2) 鈴木良平：錫杖頭はなぜ劔岳に残されていたのか、2013 年度、街中ゆったりカフェ会報、2014 年、p.2-3
- 3) 著者；立山の自然と歴史、新建築家技術者集団富山支部、会誌ゆるる、2001 年 12 月、全 1p

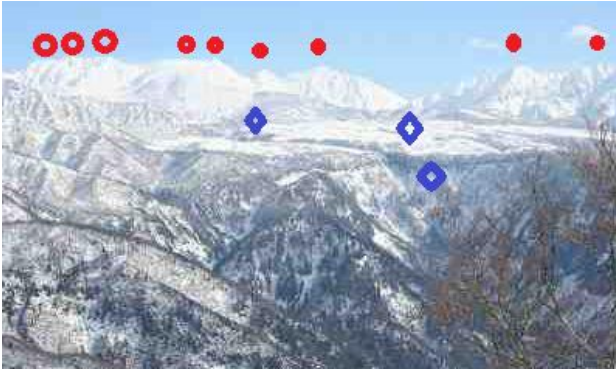
## <立山に詳しい方>

青柳周一：観光；滋賀大経済学部資料館  
鈴木圭二：日本史；富山大学文学部日本史  
久保尚文：日本史；大山歴史民俗研究会  
佐藤武彦：郷土史；歴史家・アルピニスト  
福江充：マンガ他；北陸大学、当時立山博物館学芸員  
加藤基樹：売薬他；立山博物館学芸員  
佐伯睦麿：芦峯中宮祈願殿および岩峯前立社壇の宮司  
新谷秀夫：和歌；高岡万葉歴史館学芸員  
飯田肇：山岳；立山カルデラ博物館学芸員  
佐伯知彦：石仏、山岳；立山がト・スキーストラクター  
村上\*\*：布橋灌頂会

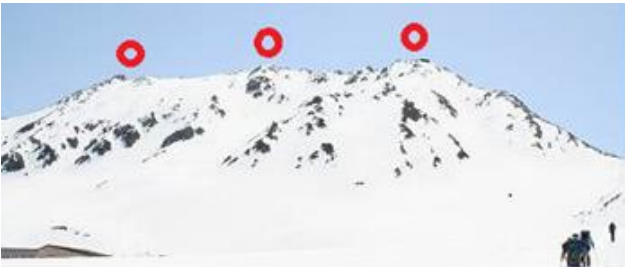
## <山の写真>



遠景：呉羽山(富山平野中央)から立山を見る。  
左から順に、剣岳、剣御前、真砂岳、  
富士の折立、大汝山、雄山、浄土山、竜王岳、  
鬼岳、獅子岳、鷲岳、



中景：大辻山(立山から東に15km程)から立山をみる。  
左から順に、富士の折立、大汝山、雄山、  
浄土山、竜王岳、鬼岳、獅子岳、鷲岳、鷲山  
菱形印は左から、室堂、弥陀ヶ原、称名滝



近景：室堂から立山をみる  
左から順に、富士の折立、大汝山、雄山、右端の所が一の越

## ===== <参考> =====

### 1. 大伴家持の和歌

#### 1.1 家持概要

平安時代の越中国司に赴任した。家持お気に入りの場所は次の三箇所である。

二上山（上は神のことのよう。奈良にもある）、  
布施の海（今の氷見市十二町瀧）、  
立山

ただし、富山の雪にはうんざりしており、また海越しの立山には興味を示さなかった。氷見から見る立山は氷見の海岸、富山湾、立山連峰という実にすばらしい光景が気にいらなかったのはなぜであろうか分からないという。



雨晴らし海岸からの立山連峰

#### 1.2 立山の和歌

立山について詠まれた歌は以下の通りである。

- ・立山に降り置ける雪を常夏に  
見れども飽かず神からならし
- ・片貝の川の瀬清く行く水の  
絶ゆることなくあり通ひ見む
- ・たち山の雪しくらしもはひつきの  
河のわたり瀬あふみつかすも

### 2. 雄山神社

#### 2.1 建物と敷地

雄山神社は、立山頂上峰本社・芦峯中宮祈願殿・岩峯前立社壇(まえたてしゃだん)の、三社殿からなっている。

また、本社は、その昔には岩峯と芦峯の神社が相対立していたため、岩峯や芦峯ではなく山頂に峰本社として置いた。



雄山神社 右上写真が昔の本殿  
他は岩峯寺の雄山神社



雄山神社管轄域は大変広く、立山一帯（劔、大日、三山、薬師）にわたっている。雄山山頂は雄山神社所有の土地であるが、山頂社務所は国有地である。

参考までに、富士山では、頂上は浅間神社のものか国有地かでもめている。山梨県は神社側に、国には静岡県がそれぞれついて争っている。

## 2.2 ご神体

ご神体は霊峰立山であり、山頂の峰本社には江戸時代までは神と仏の両方がそれぞれ二柱で祭られていた。神道では「いざなぎ」と「あめのたちからお」であり、仏教は「阿弥陀如来」と「不動明王」である。

明治になると、廃仏毀釈でこれまで立山権現社であったものが、雄山神社となった。

・補足 祭られている神々の正式名称を記す  
立山の神、廃仏毀釈以降；

伊邪那岐神（いざなぎのかみ）

天手力雄神（あめのたちからおのかみ）

江戸時代(神仏分離前)まで

立山権現雄山神 ・本地阿弥陀如来、  
太刀尾天神劔岳神 ・本地不動明王)

## 2.2 ご神体 (続)

ご神体は霊峰立山であるが、現代では立山は雄山といわれている。しかしながら、信仰の教えによれば、浄土、雄山、別山の三つの山が立山となっており、しかも浄土は過去、雄山は現世、別山は未来の性格を持っている。ご神体はその三山とみるべきである。

ここで、ご神体をなす雄山がなぜ男性をイメージさせる名前なのか、考えたい。もともとは、雄山はとも御山とよんでいたのではなかろうか。神話では山には男性、女性の神々がおられたので、山に男（雄）の意味をもたせることはないからである。女人禁制のころからか、男性のイメージが必要となって御が雄になったのではなかろうか。

ちなみに、地獄について一言。仏教が入ってから前人未到の険しい山が針の山とか地獄の山と称されるようになった。

## 2.3 宮司

昔、宮司と権宮司の二者がおり、輪番交代していた。岩峠が宮司なら芦峠が権宮司、芦峠が宮司のときは岩峠倉が権宮司となるということである。

明治に入って、権宮司が廃され、宮司は一人で雄山神社三社を統括し、常時、芦峠中宮祈願殿に詰めておられる。

## 2.4 参拝

・参拝は社に向かって行うものである。このため、社正面は南向き（太陽に向く）であるので、結果として北に向かって参拝となっている。また、参道も正面から直線状に南北に走る。

・雄山の峰本社の背が劔岳を向いているといわれているが、これは間違い。本社が南に向いているので、結果的に背が北に向き、その方向に劔岳があっただけのことである。

## 3. 神道

### 3.1 神社建築

我らにとって年に一回の初詣で神社はなじみ深いとはいえ、よく考えると分からないことだらけと思う。ここでは、神社建築の特徴をまず列挙したい。本文と重複のところもあり。

・建物：拝殿・幣殿・本殿の三棟からなる。

本殿はご神体が安置されているところ、拝殿は参拝するところ、幣殿は神に奉納するところである。

・屋根：瓦ではなく木肌葺き（後年檜葺き）である。  
仏教と抗するためという。

・立地場所：神社は氏子を守るように村の外れかつ標高の高いところに設置される。

・社の方向：神社正面は村の中央に向く。

山岳神社についても人の住んでいる方向という説と、太陽をつねに向くとして南に向くという説もある。

・社殿と祠：参拝者がぬれないように屋根があるのが社殿、ないのが祠。

・神：神は自然物の場合、本殿はなく拝殿だけがある。  
ご神体が鏡のように安置できる場合には本殿が神の住まいとなる。ただし、もともと神は出雲におられ、お祭りの際に神輿にのってやってくる。祭りが終われば神は出雲に戻る。

・寺の山号：寺には山号がある。例えば比叡山延暦寺といったように。立山の場合、神道中心であり、寺院は建立されなかった。なお、ふもとの寺院として例えば上市では大岩山日石寺がある。

### 3.2 神仏習合

・本地垂迹説(ほんじすいじゃく)は神仏習合のひとつの考えで、仏様イコール神様、大日如来は天照大見の神というもの。これに対抗して神本仏迹説は、神道を仏教と一線を画すために、神仏習合はすれども、神が



主で仏が従という考えである。今の神道はまさにそれである。

このためか、雄山神社は神仏習合時代でも修験道として仏教色の強い神社であったが、寺院ではなかったが特徴である。

・修験道 奈良時代に役小角が創始し、平安時代に盛んとなったといわれている。もともと山岳信仰と密教が結びついて、厳しい修行を中心とした信仰が根付いて修験道となったといわれている。立山の場合も、修験道が中心であったようであり、これが江戸時代に入って、真言宗か天台宗のいずれかに属さねばならなくなり、本文では、参拝のルートが芦峯ルートと大岩ルートの二つがあったのである。明治に入り、修験道は禁止されたが、仏教色を廃して神道に移ったものもある。立山信仰はこれではなかるうか。

・磨崖物の岩はもともと神道ではご神体である。ご神体の岩を彫刻して仏像とする。これも神仏習合あつてのなせることである。

### 3.3 神仏分離

・神道は明治に入って制度化され、国教となり、全国各地に神社が建立（一集落一神社）された。

・神仏分離 1868年に明治政府が神仏判然例を發布して、神仏分離がなった。岩峯にあった立山寺(岩峯寺ともいい、平安初期建立、源頼朝が修復・再建)と芦峯にあった中宮寺(芦峯寺ともいい平安初期建立であろう)が完全に消滅し、今の雄山神社を形成している。もともと神仏分離は仏教の目に余る横暴で地域民が苦しめられたことにより、廃仏毀釈が反仏教としてすすめられた。そして、立山の仏教界では、立山権現は廃され、布橋灌頂会や大権現布教が禁止となったのである。

### 3.4 布教と売薬

・越中の薬売りは、芦峯寺の立山信仰の信徒が、「一山会」という独特の組織を形成し、16世紀以降(江戸時代から)諸国を配札檀那廻りし、立山の縁起図や立山牛王紙、薬草や薬粉などを配置し、翌年代金を受け取っていた。これが売薬の始まりであった。

一方、布教に際しては、布教はマダラの絵とお札を持ち、扇子や薬などをおまけとしていたという。

・布教と売薬の関係については、40年前のある研究者が「布教者と売薬の形態が同じだからとして売薬が布教も兼ねていた」という説を発表したところ、これが一人歩きした。後年の研究によれば、布教者と売薬の接点がないことが分かっている。売薬にとっては、おもしろおかしい立山の話があれば、自分(販売者)の

素性を越中とすることができたであろうし、何よりも薬の販売がしやすかったのであろう。

### 3.5 岩峯と芦峯

立山登頂ルートには、神が降り立つ場所という意味で「峯」と称した岩峯と芦峯の集落がある。それぞれに神社もあり、参拝者の宿として宿坊という宿泊施設が結構あった。当然、両者の間には、参拝者の奪い合いがあったといわれている。

そんな宿坊が明治に入るとほとんど全滅し、芦峯に教算坊、善道坊の二軒のみが残った。

## 4. こぼればなし

- ・アルペンルートは交通公社の命名。発案の(芦峯宮司の系統)佐伯宗義さんは人を大量に呼び寄せることを嫌っていた。
- ・布橋灌頂会で使われる目隠しは前も足元も見えるようになってきている。参加費は1人2万円(5万円から値下げ)。
- ・昔の登山道は山の水脈を切らないように分水嶺に敷かれている(美女平から室堂まで)。今は分水嶺を無視して道がつくられており、生態系にかなり悪い影響を与えている。

## <Q&A>

立山に上ってみるといくつか疑問を持つ。以下に疑問を列挙する。答えについては本文中に記しておいたが、後ろ2点は現在検討中である。

- ・立山が仏教で開山といっても、立山には寺はないし、山頂もすべて神社ではないか。
- ・佐伯有頼一人の人間で開山ができるのか。
- ・なぜ阿弥陀如来に矢を射ったのか。武器がでてこなくてもいいのでは。
- ・立山山頂では劔岳に向かって参拝するとされているが、どうしてそんな考えが定着したのか。
- ・立山はなぜ女人禁制をまじめにやったのか。
- ・布教に際し、後年、売薬が本当に関わっていたのか。
- ・芦峯寺と岩峯寺との争いがなぜなくなったのか。
- ・後立山連峰は富山側の見方。しかし、後立山が北アルプスとして栄えている。東京に近いだけでこうも違いが出るものか。